

---

# Blindness

まる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Blindness

### 【コード】

N3986L

### 【作者名】

まる

### 【あらすじ】

盲目の少女イリア。イリアは学校を出ても盲目を理由に仕事ができず家と教会を行き来する日々。

ある日を境に彼女の日常は変わってしまう。

小説を書くのはほぼ初めてです。文章がおかしかったり誤字脱字が多いと思いますが今後ともよろしく願います。

## 日常01

小鳥のさえずりがあたりを包み、イリアは目を覚ます。

「ふあゝ、もう朝か」

伸びをしてイリアはベッドをでる。

イリアの一日は単純だ。

朝、目が覚めたら着替えたら家の井戸で顔を洗い、母親と朝食を作る。家族が朝食を食べて仕事に行ったら洗濯や掃除等の家事をこなす。家事が一通り終わったら夕方まで暇になるので教会で神に祈りをささげる。夕方になったら夕食を作り家族と食べ、夜まで会話して寝るだけだ。

父親や母親、兄は仕事をしているがイリアは仕事をするとはで

きない。この国では15歳まで学校で勉強するのが義務になっている。義務になった理由として、この国では商いが盛んであり他国と渡り合うためにどうしても様々な知識が必要であったからだ。

16歳になったイリアはもう働きに出てもおかしくは無いのだが、盲目であったため学校を卒業する際に仕事を探したがほぼ門前払いにあってしまった。盲目のイリアを気遣う者は多かったが仕事となれば別であり、目が見えないイリアを雇うことはメリットになるところかデメリットになることが多く、「もうしわけない」と謝り断られた。不利なのはわかってはいたがさすがにイリアも落ち込んだ。

沈んだイリアに皆が分担していた家事を両親は家事の一切を任せた。自分は世間や家族に対して何も役に立たないと思い込んでしまったイリアに何か役割を与えたかったかに他ならない。実際、分担していた家事をイリアに全て任せたことよって大分ラクになり、イリアも家事任されたことにより明るさを取り戻し、結果を良い方向に向けた。

「よし、終わった」

家事を一通り済ましたイリアは道具をしまい、支度をして教会へと向かう。教会に向かう道はちょっとした大通りになっており商いをしていられるおじさんやおばさんに話しかけられる。

「イリアちゃん、ますます可愛くなつたねえ」

「そんなことないですよ。もうお世辞言つてもダメですよ」

こんな感じで先々に話しかけられ、適当に話を済ましながら教会に着いたイリアは祭られている全能の神『アリユストローネ』に祈りをささげる。

#### 私の目に光を

幼い頃に目が見えないことが普通ではないことに気づいたイリアはずっと目が見えるように祈り続けていた。未だに叶えられないがそれでも祈り続けていた。

「イリアさん」

祈りを捧げ、立ち上がったときにシスターに話しかけられる。

「どうしましたか、シスター？」

「いえ、熱心に祈りを捧げていましたので。最近はいリアさんみたいに熱心に祈りを捧げてくださる方も少なくなってしまってます…」

シスターの声の感じからして熱心に祈りを捧げるイリアが嬉しくて声をかけてくれたのだろう。イリアは頭を横に振る。

「熱心じゃないですよ。私利的な祈りだからアリユストローネ様は私の願いを叶えてくださらないですから」

「私利的ですか？」

「ええ、目が見えますようにずっと祈っているんです。でも未だに叶えられません」

イリアは自虐的な笑みを浮かべる。シスターは眉をひそめイリアの手を取る。目が見えないイリアは手の感触に驚き、手を引きそうになるがシスターは思いのほか強い力で手を握っていてそれはできなかった。

「私利的ではないですよ。光を見たいのは当然です。だからそんな風に笑わないでください」

イリアは自身がしていた表情が酷かったことに驚き、シスターの言葉の温かさに笑みを浮かべる。哀れみの感情はなく、それは当た

り前のことだと断言するシスターの優しさが嬉しくなったからだ。

「ありがとうございます。ちょっとしんみりしちゃいましたね」

「いいですよ。あ、もう夕方になりますよ。イリアさん帰らなきゃいけませんね」

シスターは手を離し、ステンドグラスに差し込む光が赤みを差していることに気付き夕刻に近づいていることをイリアに告げる。

「もうそんな時間ですか、教えてくれてありがとうございます」

シスターにお辞儀をした後、イリアは慌てて荷物を持ち教会を後にする。

「また来てくださいね」

シスターは手を振ってイリアを見送った。

日常01(後書き)

見切り発車すぎる…。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3986/>

---

Blindness

2010年10月28日02時49分発行